

「ますらをと思へる我」と詠むことをめぐって

太田 真理

一 はじめに

「ますらを」とは「尊敬に値する立派な男子。勇敢で堂々たる男子。(略)特に武人をいうこともある。」というものが、辞書的に確認できる理解である。これは、「ますらを」の語が通論的に持っている概念を説明したものとして納得される。例えば後代において『万葉集』とその時代の歌風を一言で代表する「ますらをぶり」の用語としても用いられたのも、この意味においてである。

ところで、万葉歌の例を探してみると、他者が誰かの「ますらを」としての輝かしい姿を讃めて詠む例は期待するほど多くはない。それに対して「ますらをと思へる我」という形で、自らを「ますらを」と規定しながらも、「ますらを」らしからぬ恋の思いに沈潜し、思い悩む心の状態を詠んだものが散見される。

「ますらを」が、その存在を肯定的に把握するのではなく、「……と思へる」というただし書きのもとに表現された事実をどう捉えたらよいのだろうか。それは「ますらを」とどう繋がり、い

かなる表現の質を持っていたのか。このような観点から、『万葉集』における「ますらを」及び「ますらをと思へる我」の表現性について明らかにしようとするのが、本論の目的である。まずは「ますらを」が本来的に持っていた語義を、研究史をたどりつつ確認していきたい。

二 「ますらを」の語義

「ますらを」とは、『万葉集』の歌でしばしば用いられる男子の呼称である。『日本書紀』『風土記』にも例があるが、そのほとんどは『万葉集』の歌の中に見られ、中古以後はほとんど使用されなくなる。上代に特徴的な語である。

表記としては、「麻須良乎」(5)「麻須良男」(3)「麻須良袁」(1)「麻須良雄」(1)「麻周羅遠」(1)という万葉仮名表記のほか、漢字が表意文字として用いられていると考えられるものに「益荒夫」(1)「益卜雄」(1)「大夫」(41)「健男」(2)「建男」(1)「武士」(1)があり、『万葉集』全体では五十八例を数える。

「ますらを」の語義については、現在まで多くの研究者によ

る考究が積み重ねられている。上田正昭氏は、「ますらを」の表記に着目し「大夫」の用字が大半を占めることから、単なる「男子の総称」ではなく、「治むる大夫」の自覚を持った上・中級の官人の意とした³。遠藤宏氏は、「ますらを」の原義が「優る人」「優れた男」であることを認めたくえて、「ますらを」たる資格を有するのは官人階級に限定され、しかも大丈夫たるに足る倫理的・道德的規範という内実を要求されると述べた⁴。いずれも、官人（公人）としての「大丈夫」の意に重きを置いた解釈である。

稲岡耕二氏は、これらの論に対し、「ますらを」の語義を通時的に見きわめることが必要であると主張した。元々人麻呂歌集歌にみられる「建男」「健男」の表記が古く、勇武の男あるいは剛強の男をさしたが、やがてその意味を変化させ「大夫」の文字を当てるようになり、濃厚な官人意識のもとに男子官僚をさす意となったとする。内藤明氏もこれを承け、「ますらを」の原義が「ますら」に男子の意の「を」がついたものとし、「ます」が優越する・すぐれるの意を持つことから、賛辞としての「ますらを」の存在を想定した。そして、まずは勇猛な武人としての意を背景におきながら、律令官人として求められるべき男の理想的な姿、意識としての「ますらを」像が作られていったと論じた⁵。

『万葉集』で「ますらを」を詠んだ歌について、その語が示す意味において確認してみると、まず最初にあげられるのは、稲岡氏、内藤氏が原義としてあげた「勇猛で立派な男子」の意である。

ますらをのをさつ矢手挟み立ち向かひ射るの形は見るにさや
けし (①六一・舎人娘子)

梓弓 手に取り持ちて ますらをのをさつ矢手挟み 立ち向か
ふ 高円山に… (②二三〇・金村・志貴皇子挽歌)

ますらをの弓末振り起し射つる矢を見見む人は語り継ぐが
ね (③三六四・金村)

…ますらをのをとこさびすと 剣太刀 腰に取り佩きさつ
弓を 手振り持ちて 赤駒に 倭文鞍うち置き 這ひ乗りて 遊
びあるさし… (⑤八〇四・憶良・哀世間難住歌)

八〇四番歌にある「をとこさぶ」は、「をとめさぶ」と対をなす。すなわち「をとめ」―「をとこ」の対となる表現で、「成年に達した男子らしい」という意である。ここでは、「ますらを」と並立して詠まれていることから、「ますらを」と同じ価値を持ち、それを強調する表現として用いられたと考えられる。すなわち、共に「剣太刀」以下に示されたような「姿・行動のりっぱな武人」という価値を付与された存在であるといえよう。これについては、とくに狩をする姿を描写したものが多く、狩が「ますらを」の勇猛さを表すものとして象徴的にとらえられていたと考えられる。

「ますらを」の二つ目の意味としてあげられるのは、律令制度下の官人（公人）である。

ますらををはみ狩に立たし娘らは赤裳裾引く清き浜びを

(⑥一〇〇一・赤人・難波宮之時)

この歌からは、宮仕えの「娘子」の対義語として、「狩」に象徴され宮廷へ奉仕する者として認識される「ますらを」がある

ことがわかる。

ますらをの轡の音すなりものふの大臣楯立つらしも

(①七六・元明天皇)

は、武をもつて宮廷に奉仕する男性である。また、

ますらをの鞞取り負ひて出でて行けば別れを惜しみ嘆きけ

む妻

(②四三三二・家持)

という歌に表わされたのは、出征する防人の姿である。普通、防人自身は自らを「ますらを」とは詠まないものであるが、この場合は第三者である家持によって、鞞を負つて武装を整えた姿を「ますらを」であると表現されたものである。

大君の任けのまにまにますらをの心振り起しあしひきの山坂越えて天離る鄙に下り来… (③三九六一・家持)

…大君の命のまにま ますらをの心を持ちてあり巡り

事し終はらば…

(④四三三二・家持・追痛防人悲別之心作歌)

の歌からは七六番歌同様、官人として天皇の命に忠実に、心を奮い立たせて任を全うすることができることが、「ますらを」の存在意義であると考えられたことがうかがわれる。さらに、次のように氏族意識に基づき官人社会の中で「名」を立てることを重んずる「ますらを」も、家持によって多く歌に詠まれた。

ますらをは名をし立つべし後の世に聞き継ぐ人も語り継ぐ

がね (⑤四一六五・家持・慕振勇士之名歌の短歌)

…空言も祖の名絶つな大伴の氏と名に負へるますらを

の伴 (⑥四四六五・家持・喻族歌)

三点目は、理性的で感情に埋没しない男子としての「ますら

を」である。

世の中の常なきことは知るらむを心尽くすなますらをにし
て (⑦四二二六・家持・甲賀南右大臣藤原二郎之喪慈母患)

大君の命恐み 妻別れ 悲しくはあれど ますらをの

心振り起し 取り装ひ 門出をすれば…

(⑧四三九八家持・為防人情陳思作歌)

これはいずれも、死別・生別にかかわらず、肉親との別れの悲しみに沈むことを「ますらを」に相応しくないとして、超克しようとする歌である。

以上のように、勇猛な男子の意を示し、また一人前の男子として周囲から期待される理想の男性像、立派な官人、公人を示すのもまた「ますらを」であることが確認される。

その一方で、第三のあり方に反するものとして、次のような「ますらを」らしからぬ姿が『万葉集』には多く描写される。

それは、相聞歌、いわゆる恋情を詠んだ歌々である。

…ますらをと 思へる我も 草枕旅にしあれば 思ひ遣るた

づきを知らに 網の浦の 海人娘子らが 焼く塩の 思ひそ焼

くる 我が下心 (①五・軍王・幸讀岐國安益郡之時)

…ますらをと 思へる我も しがたへの 衣の袖は 通り

て濡れぬ (②一三五・人麻呂・從石見国別妻上来歌)

ますらをと 思へる我やかくばかりみつれにみつれ片思をせ

む (④七一九・家持・贈娘子歌)

ますらをと 思へる我や水茎の水城の上に涙拭はむ

(⑥九六八・旅人・「上京時娘子作歌」への和歌)

ますらをと 思へる我をかくばかり恋せしむるはからくはあ

りけり

天地に少し至らぬますらをと思ひし我や男心もなき

(11)二五八四・正述心緒

(12)二八七五・正述心緒

これらの歌には、恋の思いに身を焼く、恋しさのあまり涙で衣の袖を濡らす、片思いに沈むなど、みてきたような「ますらを」観からはおよそ懸け離れた姿が詠まれている。「ますらを」とは、個人的な感情に埋没することを良しとしないものであつたから、恋情という価値観とは相容れないものであつたはずである。

このような「ますらを」の姿はなぜ歌に詠まれたのであろうか、節を改めて考察していきたい。それを探ることは、「ますらを」の内実をさらに明らかにしていくことに繋がると考える。

三 「ますらをと思へる我」とは

前節であげた「ますらを」らしからぬ姿を詠んだ歌(六首)は、恋の思いに沈潜する「我」の姿が、「ますらを」に「と思へる」という但し書きを加えて自己規定されているところに特徴がある。

この場合、「ますらをと思へる我」を前後の内容に注意して訳すと、「ますらをと思っている私、だがしかし、ますらををらしくはない私」となる。したがって、「ますらをと思へる我」と詠むことは、あくまでも自らを「ますらを」と規定し、「ますらを」であることを前提としながらも、それらしくは無い、あるいはそれに反する姿、行動であることを認めて歌を詠んでいく態度であるといえよう。

この場合、前節で挙げた「ますらをと思へる我」の歌が、いずれも広い意味での相聞歌の仕立てとなっていることは、心に留め置きたい事実である。一首目に挙げた軍王の歌は題詞に「幸讃岐國安益郡之時」とあり、部立ても雑歌ではあるが、所謂行幸従駕の歌というよりは、旅にあつての恋の物思いを詠む内容となつている。「ますらをと思へる我」の初出として注目される歌である。

幸讃岐國安益郡之時軍王見山作歌

霞立つ 長き春日の 暮れにける わづきも知らず むら肝の
心を痛みぬえこ鳥うらなけ居れば 玉だすき かけの直し
く遠つ神我が大君の行幸の山越す風のひとり居る我が
衣手に朝夕にかへらひぬれば ますらをを 思へる我も草
枕旅にしあれば 思ひ遣る たづきを知らに 網の浦の海人
娘子らが 焼く塩の 思ひそ焼くる我が下心 (15)

作者軍王についての詳細は伝わっていないが、行幸の旅に随行していた男性の一人であると考えられる。春の日が暮れ落ちると心が痛み、旅の独り寝を物憂く思い、故郷(の妻)が思われるという秘めた心が詠まれている。それは、正統的な「ますらを」としては到底表に出せない、妻恋いの思いである。

これと同様、前節にあげた歌々のうち二八七五番歌では、「ますらをと思ひし我」がすなわち「男心もなき」と象徴されるほか、他の歌からも「片思をせむ」(七一九)、「涙拭はむ」(九八六)、「かくばかり恋」する(二五八四)などの状態を、具体的な「ますらを」らしからぬ要素として読みとることができる。

すでに確認したように、「ますらを」は本来、個人的な感情

に沈滞しない性格を持つはずであるから、恋の思いに捉われ嘆くのは「ますらを」らしからぬ行為であつて、「ますらを」は恋を歌に詠めないことになる。恋に沈む姿を詠むためには、「ますらを」は何らかの工夫をする必要が出てくる。言うなれば、「ますらを」であるという制約を取り払うことができればよい。そこで、「〜と思へる」という形で自己を捉え返し、恋する心を歌に詠んだのである。「ますらをと思へる我」は「ますらを」が恋への耽溺・愁嘆を詠むために要請された表現であつたといふことができよう。

『万葉集』ではこれに似た表現として、「をとこ」についての次のような表現が指摘できる。「をとこ」とは、一人前の男の意である。

…みどり子の乞ひ泣くごとに取り与ふる物しなれば
をとこじものわき挟み持ち我妹子と二人我が寝し枕つ
くつま屋の内に昼はもうらさび暮らし夜はも息づく明
かし嘆けどもせむすべ知らに恋ふれども逢ふよしをな
み…

②二二〇・人麻呂・泣血哀慟歌
…我妹子とさ寝しつま屋に朝には出で立ち偲ひ夕には
入り居嘆かひわき挟む子の泣くごとをとこじもの負
ひみ抱きみ朝鳥の音のみ泣きつつ恋ふれども験をなみ
と…

③四八一・高橋朝臣・亡妻挽歌
面形の忘るとあらばあづきなくをとこじものや恋ひつつ居
らむ

④二五八〇
二二〇番歌と四八一番歌は挽歌であるが、「我妹子」(妻)に先
立たれた男が残された子と共にあつて妻を恋い偲ぶ内容の歌で

ある。「をとこじもの(子を)脇ばさみ持ち／負ひみ抱きみ」という表現で、妻亡き後の慣れない子育ての様子が描き出される。「…じもの」は、一般には

…鹿じものい這ひ伏しつ つぬばたまの夕に至れば大殿
を振り放け見つつ鶉なすい這ひもとほり侍へど侍ひ得
ねば…

②一九九
…大殿の上にひさかたの天伝ひ来る雪じもの行き通ひ
つつ…

③二六一
のように、鴨、鹿、鳥、犬、馬、などの動物、或いは雪、床など人間以外のモノや自然現象が本来持っている特有の習性や属性をふまえ、そのモノではないものについて、そのモノらしい、或いはそのモノのようだという様子を述べる語である。

しかし、「をとこじもの」は少々事情を異にする。「をとこじもの」は、人を表わす言葉に「…じもの」が付いた唯一の例である。これを、現行の注釈書では「男らしくもなく」「男のくせに」と訳し、「ジモノはこの場合のみ違例で未詳」と解釈している。他の「…じもの」の解釈の方法とは異なるが、歌意からもそのように解釈することが適当であらう。

このとき、子を「脇挟み持ち」「脇挟む」というのは、先にみた武人としての「ますらを」が弓矢を「手挟む」表現と似通うものがあるように思われる。

母(女性)が子を抱く姿は、

(沙本毘売命)如此設け備へて、其の御子を抱きて、城の
外に出しき。

〔古事記〕中巻垂仁天皇
みどり子の若子髪にはたらちし母に抱かえひむつきの

稚児が髪には：

(16)三七九一・竹取翁歌)

と表現される。「むだく」は、「抱持、上取也、牟太久」(華嚴音義私記)とあり、『万葉集』には他に「手抱く」(6)九七三、(19)四二五四)ともあるように、両手で抱えて持つことであるから、この「をとこ」の抱き方は母のものとは異なり、いかにも無骨で子の扱いに不慣れな様子を表わすものと解釈できよう。子は、母に抱かれて育てられることを前提としたうえで、「男らしくもなく」「男でありながら」子を抱き、子に翻弄される姿を詠むことで、子の母(男にとつての妻)の不在と喪失感を強調し、妻への思慕を表現したと考える。

二五八〇番歌は相聞歌で、「男らしくもなく／男でありながら、恋統けることだろうか」と恋の思いにとらわれる姿を詠む。管見によれば、「をとこ」が恋と直接結びつく心情を歌に詠んでいるのは、ここにあげた三首(或本歌を含めれば四首)以外にはみられない。自分が一人前の男であるという前提に立ちながら、「男ではあるけれども」と一旦、そのもの持つ価値に相反するような様子を詠むことで、却って妻や恋人に対する強い愛情を表しているのである。

このように解すると、「ますらをと思へる我」と「をとこじもの」は同じような表現手法であったということができているのではないか。ある価値や自負を持った「ますらを」、「をとこ」であることを前提にしながら、いずれもそれらしさを止揚することによって、本来歌に詠むことができないはずの、恋にかかわる思いを表現できるようになったのである。

四 相聞のための用語としての「ますらをと思へる我」

前節では、「ますらを」が、「ますらを」であることを一旦留保し、その意味を転回させることで、恋する「我」を詠み得たことを述べた。次は、「ますらを」がどのような言葉と結びついて詠まれていくかを探ることで、その内実を掘り下げたい。「ますらを」は、しばしば「心」という語と結びつく。

…ますらををの、心振り起し 剣太刀腰に取り 佩き 梓弓 鞆取り 負ひて… (3)四七八・家持・安積皇子挽歌)

大君の 任けのまにまに ますらををの 心振り起し あしひきの 山坂越えて 天離る 鄙に下り来… (17)三九六二・家持・忽沈枉疾殆臨泉路)

大君の 命恐み 妻別れ 悲しくはあれど ますらををの 心振り起し 取り装ひ 門出をすれば… (20)四三九八・家持・為防人情陳思作歌)

これら三首における「ますらを」は、その「心」を振り起して君主に奉仕する姿が詠まれる。官人としての心構えや気概を問われている歌である。あらまほしき「ますらを」として、当時の人々の共通認識であったと考えられる。その一方で、その「心」を「現し心」「聡き心」とし、それを失っている様子も詠まれる。

ますらををの 現し心も 我はなし 夜昼といはず 恋ひし 渡れば

(11)三三七六・人麻呂歌集・正述心緒)

ますらををの 聡き心も 今はなし 恋の 奴に 我は死ぬべし

(12)二九〇七)

先に挙げた三首との落差を感じる歌である。「現し心」は確かな心持ち・正気であり、「聡き心」とは理解力・判断力が優れている心の状況をいう。それらが失われているというのは「恋ひし渡り」「恋の奴」にとらわれている状態である。所謂「恋死表現」とも相俟って、あからさまな恋の言挙げである。

ますらをの心はなくて秋萩の恋のみにやもなづみてありなむ
⑩二二二・詠花

昔の根のねもころ妹に恋ふるにしますらを心思ほえぬかも

この二首も、いずれも恋することによる「ますらを」の心の喪失を詠んでいる。ところが、心がなくなつて恋に泥むのか、或いは恋することで心がなくなるのか、二首において「ますらを」らしい心の喪失と恋への耽溺の順序は逆になっており、どちらが先と決められるようなものではなさそうである。

天地に少し至らぬますらをと思ひし我や男心もなき

⑪二八七五・正述心緒

では「ますらを」とはいえないまでも少し届かぬほどかと思つていた私だが、恋することで「ますらを」らしい雄雄しい心を失つてしまったと嘆いている。

こうして見たように、「ますらを」は、その心の持ち方が問題とされる。それはその対極に、常に「ますらを」本来のあり方が意識されていることに他ならない。その心を保持することでも放棄することでも、心のあり方を付度され評価されること重要なのである。

その中で、次の金村の歌は、「ますらを」の心を失つた様子

が「たわやめの思ひたわみて」という句と結びついており、女性が恋に悩む姿と近接するものとして注目に値しよう。

：ますらをの、心はなしにたわやめの思ひたわみてたもとほり我はそ恋ふる船楫をなみ

⑫九三五・金村・幸於播磨國印南野時

このように「ますらを」の心を失つた表現が「たわやめ」の表現と重なつてゆくことについては後述するが、その前に「ますらを」が「思ふ」と結びついた例についても考えておきたい。

ますらをの思ひわびつつ度まねく嘆く嘆きを負はぬものかも
⑬四六四六・大伴駿河麻呂

ますらをの思ひ乱れて隠せるその妻天地に通り照るともあらはれめやも一に云ふ「ますらをの思ひたげびて」

⑭三三五四・人麻呂歌集

あの物思いになど捉われなはずの「ますらを」が物思いをするのだ、これほどの嘆きをあなたは負わないものか(四六四六)、または、あの「ますらを」が今や思い乱れて妻を隠すのだ、見つかることがあろうかと、ますらをの「思ひ」は恋の思いの丈を述べるための材料となつている。ますらが恋をしたのだからこそ、並みの恋よりも一層恋する力も強く、価値のある恋であると匂わせるようである。やはり、恋する心を強調する表現であると考えられる。集中にはこの他にも、

ますらをや片恋せむと嘆けども醜のますらをなほ恋ひにけり
⑮二二七

のように、雄々しく冷静であるべきはずの「ますらを」が、なりふりかまわず恋をするという歌もある。この歌には、

嘆きつつますらをのこの恋ふれこそ我が結ふ髪の漬ちてぬ
れけれ (②二一八)

という和歌がある。恋などしないはずの「ますらを」が、嘆くほどに自分を思ってくれたからこそ、結っていた髪が濡れてほ
どけてしまったというのである。「ますらを」の恋が、通常以
上の強さを持つものとして肯定的に捉えられている例として注
目される。

これらのことから「ますらをと思へる我」は、前節までにみた、
個人的な感情に埋没することを良しとせず恋情という価値観と
は相容れないはずの「ますらを」が、恋を詠むための言葉であつ
たといつてよい。「万葉集」では恋を詠む歌の多くが相聞と部
立てされることから、「相聞のための用語」であるともいえよ
う。「心」のあり方を問われ、「物思ふ」存在としてのあり方を
問われることは、本来の「ますらを」のあり方に照らすと「反
ますらを性」を示すものである。しかし、恋を詠むために、「ま
すらを」は言葉のレベルでその「反ますらを性」を受容したの
であり、それによつて恋の思ひはより強いものとして表現され
ることとなった。

五 「たわやめ」の表現との近接

当節では、前節で触れた「ますらをと思へる我」の恋をめぐ
る表現と、それが女性が恋に悩む姿と近接してゆくという問題
について掘り下げたい。「万葉集」には、次の歌にみられるよ
うに、「ますらを」の涙、または涙で袖が濡れる様子が詠まれ
ている。

…ますらをと 思へる我れも 敷袴の 衣の袖は 通りて濡れ
ぬ (②二三五・人麻呂・石見相聞歌)

(⑥九六八・旅人・上京時)

こうした人目を憚らず涙を流す姿もまた、「ますらを」らしか
らぬものであると受け取られてきた。「万葉集」相聞歌では、
他にも男が泣く歌は多いが、「涙で袖が濡れる」という表現を
探してみると次のような情況になっている。

…たもとほりただひとりして 白たへの 衣手干さず 嘆き
つつ 我が泣く涙有間山雲居たなびき 雨に降りきや

(③四六〇・坂上郎女・理願挽歌)

相思はぬ人をやもとな白たへの袖漬つまでに音のみし泣か
も (④六一四・山口女王・贈家持)

…我が子の刀自をぬばたまの夜昼といはず 思ふにし我
が身は瘦せぬ 嘆くにし袖さへ濡れぬ…

(④七二三・坂上郎女)

我妹子が我を送ると白たへの袖漬つまでに泣きし思はゆ

(①二五一八・正述心緒)

妹に恋ひ我が泣く涙しきたへの木枕通り袖さへ濡れぬ或本
歌曰枕通りてまけば寒しも (①二五四九・正述心緒)

君に恋ひ我が泣く涙白たへの袖さへ漬ちてせむすべもなし

(①二九五三・正述心緒)

葦垣の隈処に立ちて我妹子が袖もしほほに泣きしそ思はゆ
(②〇四三五七・防人)

…今日だにも 言問ひせむと 惜しみつつ 悲しびませば 若

草の妻も子どもをちこちにさはに囲み居 春鳥の声の
吟ひ白たへの袖泣き濡らし携はり別れかてにと：

(20)四四〇八・家持・陳防人悲別之情

これらの歌で、「涙で袖が濡れる」表現の主体を分類して確認すると、男―1、女―6、家族―1という内訳になっている。この結果から「袖が濡れる」という表現は、おもに恋する女性の行動を詠み表わしたものと見えるだろう。

万葉歌で恋する女性を表現する語としては「たわやめ」がある。これについて古橋信孝氏は、巻十三・三三三三番歌の表現を分析、同歌が「神謡として読める」としたうえで坂上郎女の祭神歌(③三七九)などを勘案し「手弱女は神女のことである」と説いた。内藤明氏は、「男の視線を通しての、かくあるべき女の像であると指摘した。また飯田勇氏は、「官人の言葉」というアプローチから、『万葉集』における男・女の性差(ジェンダー)の問題を提起するなかで、「恋において男とまったく対等に振る舞っている(を)とめ」という存在」に対し「男に対して、か弱い性としての女、「たわやめ」が成立する」と述べた。吉田修作氏はこれらの論を承け、「たわやめ」がその心のありかたを強調されることに注目、「を)とめ」に対し「その女性性がより心情的に意識された語であった」と論じた。これらの論及は、手法は異なるものの「を)とめ」から「たわやめ」への流れをみることで、「たわやめ」の語の生成過程とそれが含み持つ意味について明らかにしており、首肯すべきであろう。

しかし、筆者は「を)とめ」と「たわやめ」の関係性について「を)とめ」は殆どが雑歌の中で使用され、始原の神聖性を保持

するゆえに日常性を脱したところに存在する「を)とめ」への憧れ心を男性の側から詠むのが主な用法で、「を)とめ」自身が自らの恋の心を詠むことはないのが通常であるのに対し、「手弱女」の用法としては、女性が自らを「手弱女」と称し或いは規定して、恋する自己や恋の苦しみ・恨みを詠むと考察したことがある。この観点から、「たわやめ」については、『万葉集』相聞において恋を詠む語として、あえて「を)とめ」とは対立的な意味に焦点をあてて問い直してみる必要があると考える。

「たわやめ」の『万葉集』での使用数は全十例と多くはないが、特徴的な表現をあげる。

岩戸割る手力もがもたよわき女にしあればすべの知らなく
(③四一九・河内王葬豊前國鏡山之時手持女王作歌)
のように、身体的な能力においてひ弱な女人を示すのが原義であるのは間違いないが、

…我が背子が 行きのまにまに 追はむとは 千度思へど
たわやめの 我が身にしあれば 道守が 問はむ答へを
言ひ遣らむ すべを知らにと 立ちてつまづく

(④五四三・金村)

ともあるように、恋に思い悩み、途方に暮れる姿を「すべを知らず」と一人称で詠んでいる。さらに、

…嘆けども 験をなみ思へども たづきを知らに たわやめ
と言はくも 著くたわらはの 音のみ泣きつつ たもとほり
君が使ひを 待ちやかかねてむ

(④六一九・坂上郎女・怨恨歌)

ひぐらしは時と鳴けども恋しくに たわやめ我は定まらず泣

く

(10)一九八二・夏相聞・寄蟬

などと、恋愛におけるつらさを「泣く」という言葉で引き受けている。これは、恋の思いのあまり「涙で袖が濡れる」表現とも通ずるものと考えられる。このように、自己を「たわやめの我が身」(五四三)、「たわやめ我は」(一九八二)と規定したうえで歌作していく意識は、「ますらをと思へる我」に通底するものがあるといえよう。

ちなみに、

：秋の黄葉まき持てる小鈴もゆらにたわやめに我れはあれども引き攀ちて枝もとををにふさ手折り我は持ちて行く君がかざしに

(13)三三三三

の歌の「たわやめに我れはあれども」について、ひ弱なはずの「たわやめ」ではあるが、黄葉の枝を引き寄せて折り取つて君の髪挿しとして持つて行こうと詠んでいるところは、自分が「たわやめ」であることを自覚しながら、その価値観とは反するような行動性を示すことで、君への思いの強さをいう。その詠み方は、まさに「ますらを」に対する「ますらをと思へる我」の裏返しである。ある価値を持つ自己規定の語をふまえ、それとは反する姿で詠むことで却つて感情を強調する効果をもたらすのである。

このように考えてくると、男女を表す語としては「をとこ」「を」とめ、「ますらを」―「たわやめ」が対応すると考えられているが、「自ら恋を詠む存在か否か」という観点からいうと、次のような対応として把握することが可能なのではないだろうか。

ますらを

をとめ

： 恋を詠まない

⇔

ますらをと思へる我 ― たわやめ

： 恋を詠む

(相聞のための用語)

そうだとすれば、人麻呂の石見相聞歌に詠まれた、いかにも「ますらを」らしからぬ「涙で袖を濡らす」という表現も、「ますらを」が自らを「ますらをと 思へる我」と規定し、「たわやめ」の恋表現と近接させることで、恋する心を歌に吐露したものであるということができよう。涙で袖を濡らす「ますらをと思へる我」は、恋心の極まった様子を顕わにして憚らない。「たわやめ」が恋する表現と近接させることで、「ますらを」と「ますらをと思へる我」の落差は一層大きなものとなった。その結果、恋を詠む、相聞の表現としてはより切実さが増すことになったと考える。

六 むすびにかえて

「ますらを」の本来の意味に照らしてみると、「ますらをと思へる我」は、武人としての自負心や官人としての矜持を一旦取り払ったところに生まれた、恋の歌を詠むために新たな自己規定をした言葉、すなわち「相聞のための用語」であった。それは、あらまほしき「ますらを」に反する姿をあえて詠むというかたちをとり、しばしばその心のあり方や思いの内実を問われながら、「たわやめ」の表現と近づいていく。その結果、本

「ますらをと思へる我」と詠むことをめぐって

来の「ますらを」の理想的なあり方との落差を顕現させ、際立
てることとなった。

「ますらを」とは、元来、相聞歌の作り上げる恋する二人の
世界の外郭にあるものであった。公の存在として、感情を制御
し、周囲からも期待される「ますらを」。それに対し、「ますら
をと思へる我」は、恋の切なさ辛さというものを積極的に自己
の内部に受容していくとともに、情緒的に歌に詠み表わしたの
である。これが、両者の持つ表現性の差異であり、特色であった。
さらに言えば、「ますらをと思へる我」は「ますらを」が恋
の世界に参与するために必要とした表現であった。もとより相
聞歌の世界とは相容れなかった「ますらを」を相聞歌の世界に
解放するために生成したという意味において、まさに「相聞の
ための用語」であったと結論づけることができるのではないだ
ろうか。

それはやがて『古今集』以降、男性歌人が自然に、盛んに恋
に耽溺する歌を詠み、万葉の時代にもまして「恋歌」が隆盛し
ていく礎にもなっていると考えているが、その点については今
後の課題としたい。

注(1) 『時代別国語大辞典上代編』三省堂 一九六七年十二月

(2) 「大夫」の表記であっても、「ますらをと」と訓じられ
ると考えられる二例は、今回省いた。また、「武士」は、「も
ののふ」の訓もある(おうふう社版『万葉集』、小学館新
編日本古典文学全集など)が、「ますらを」の訓をとって
いる。

(3) 上田正昭『「大夫」の文学』『日本古代国家成立史の研究』
青木書店 一九五九年十二月

(4) 遠藤宏「作者未詳歌群と『ますらを』意識」『古代和歌
の基層 万葉集作者未詳歌論序説』笠間書院 平成三年一
月(初出は『論集上代文学』一九七〇年十一月)

(5) 稲岡耕二『万葉集の歌人と作品』『万葉集の作品と方法』
岩波書店 一九八五年二月

(6) 内藤明『「万葉集」の「ますらを」と「たわやめ」』『早
稲田人文自然科学研究』第五十号 一九九六年十月

(7) 防人自身は自己表現にあたり「荒らし男」の用語をとる。
「荒し男のいをさ手挟み向ひ立ちかなるましづみ出でてと
我が来る」(20四三〇)の如くである。

(8) 中西進『万葉集全訳註原文付』講談社文庫 一九七八年
八月 二一〇番歌脚注

(9) ①六一、②二三〇、「ますらをの さつ矢手挟み」、⑩
三八八五に「梓弓 八つ手挟みひめ鍬 八つ手挟み」⑪
四四六五「はじ弓を 手握り持たし 真鹿子矢を手挟み添へ
て」など、いずれも弓矢を手挟んで持つ所作が「ますら
を」のものとして歌に詠まれている。他に「挟む」の用例
はみられない。

(10) 集中には他にも、

ますらをの伏し居嘆きて作りたるしだりの柳の縋せ我
妹 (10一九二四)

という歌もあって、恋に嘆き沈むことなどありえないはず
のますらをが、嘆きながら作った髪飾りであるから、どう
か髪にさしてほしいといった例もみられる。

(11) 男—⑪二五四九

- 女―③四六〇、④六一四、④七二三、①二五一八、⑫
二九五三、②四三三七
家族(妻子)―②四四〇八
- (12) 古橋信孝「恋歌の位相」『古代和歌の発生』東京大学出版会 一九八八年一月
- (13) 注6に同じ。
- (14) 飯田勇「男・女関係としての宮廷と文学―『万葉集』の「ますらを」「みやびを」を視座として―」『古代文学』第三八号 一九九七年三月、「律令官人の言葉の位相」『古代文学叢書I 神の言葉・人の言葉―(あわい)の言葉の生態学―』武蔵野書院 二〇〇一年一〇月
- (15) 吉田修作「スサノヲ手弱女を得つ」『日本文学』第五八卷第五号 二〇〇九年五月
- (16) 拙稿「万葉集の『をとめ』『をとこ』考」『フェリス女学院大学大学院紀要』第一号 二〇〇四年三月、「笠金村『娘子に詠へられて作る歌』―相聞歌としての表現の特質とその意義―」『古代文学』第四六号 二〇〇七年三月